

## 釜屋間歩とその周辺

釜屋間歩は、石見銀山の歴史上、最高のサクセスストーリーの 1 つが生まれたところです。この坑道は、1602 年に安原伝兵衛という名の山師により掘られ、彼はすぐに豊かな銀鉱脈を発見します。翌年、釜屋では、その数年前に同鉱山に対する直接的な支配権を掌握していた江戸（現在の東京）の中央政府である将軍家のために、13.5 トンという驚くべき量の銀が生産されます。この大変な献上品により、安原は将軍・徳川家康（1543～1616）への謁見を許可され、称号を与えられた上に、華麗な胴服と扇子が贈られました。胴服は、安原が銀鉱脈を発見する前に祈願を行ったとされる清水寺に寄贈され、現在は重要文化財に指定されています。石見銀山世界遺産センターには、胴服の複製品が展示されています。

釜屋間歩の近くでは、1600 年代初頭の採掘跡が複数見つかっています。この地域の銀鉱脈は非常に地表に近い場所にあることが多いため、場所によっては、鉱夫たちは坑道を使わず、丘の斜面を直接掘っていたようです。地面を平らにし、建物を建てるためのスペースを作るため、崖も掘削されています。付近では雨水を集めるために岩に穴が掘られましたが、これは鉱石を洗って、銀を含む小片を効率的に集めるために必要とされたものです。これらの遺構は、ここで見つけた銀精錬の副産物と共に、安原伝兵衛の時代から、同地域で最後の坑道群が掘られた明治時代（1868～1912）まで、釜屋間歩を中心とする谷の両側で大規模な採掘が行われたことを示しています。